施設ユーザーによる高齢者施設の色彩環境の評価

○山下 真知子

武庫川女子大学大学院 生活環境学研究科

A Case Study on Evaluation of Color Environment by users in Diverse Elderly Care Facilities

Machiko Yamashita

Graduate Student, Dept. of Human Environmental Sciences, Mukogawa Woman's Univ.

1. はじめに

高齢化社会が加速している昨今、ケア環境のあり方が問われ、誰もが当たり前の生活の質を保持する環境作りへの意識が高まっている。ここ数年、アメニティ環境としての「癒し」や「和み」といった抽象的な言葉が話題になり、高齢者施設においても、加齢による身体機能の変化に対応する設備設計だけではなく、心理的な配慮へのさまざまな方法が示されてきた。しかし、高齢者施設の色彩設計に関しては、その殆どが一般的な内容にとどまり、具体性に乏しい。

本研究は、高齢者のケア環境として、加齢による感覚機能の低下をやわらげ、当たり前の生活の質を支援する適切な色彩設計の指針を明らかにすることを目的とする。高齢者施設の色彩環境の実態を把握しながら検討を重ねる中で、これまでわかったことを総括すれば、①ユーザーの日常は設計者の思いを超えたところにある。②内部の色彩環境は、ほぼ同一・類似した色彩で明度・色度の変化に乏しい。確かに同一・類似した色彩で構成された空間は落ち着いた雰囲気を与えるが、この単調な傾向が、療養と生活機能の回復を目的とする高齢者のケア環境として適切かどうかは検討すべきである^{註1)}。重要な点は、ユーザー一人ひとりが③自分の「場」を認識でき、④自分の「行為の目的」を達成でき、⑤ユーザーの生活機能の回復支援プログラムに配慮し、⑥適度の刺激によってユーザーの機能低下を抑制し、⑦看護・介護従事者による人的ケア行為を相補しうる色彩環境であることである^{註2)}。

高齢者施設の建築内部の色彩設計は、空間の全体性におけるコンセプトや目的・用途だけではなく、施設のユーザー自身の身体機能や生活機能に視点をおくべきである。これは、ユーザーたちが施設という生活の場の中で当たり前にもつ欲求や価値観を作り手として可能な限り共有し、作り手と使い手の双方向から検討することに他ならない。そこで、本報では施設ユーザー自身の色彩環境に対する欲求や価値観を明らかにし、その手がかりを得るものとする。

2. 調査方法・実験概要

2.1 被験者

兵庫県下の療養型医療施設 2 施設、老人保健施設 10 施設、計 12 施設のユーザー 263 名 (♂:76 名 ♀:187 名; 平均年齢 81.4 歳) 分のデータを分析対象とした。全被験者は要介助を含めた自立排泄。認知症ユーザー 57 名で、その結果に差異は認められなかった。

2.2 手続き

施設通路、共用トイレ、療養室それぞれに4種の実験画像(各 A4 サイズ)を提示し、ユーザーの「快・不快」の印象をユーザーの発語及び指差しによってデータ収集した。(回答は通路、トイレとも、1人につき「快・不快」(或いは「好き・嫌い」)で2回答を得た。実験者の質問回数は1回で画像パネルを提示し、被験者が回答する迄待つ。)以下は通路、トイレそれぞれの施設実態の特徴・傾向を具現化した2画像を含めた4画像の設定概要である。

◆実験画像: 通路(1)～(4)の設定概要

【図1. ユーザーに提示した4つの通路実験画像】

- (1)療養型医療施設の特徴を再現した通路
- (2)看護・介護従事者が求める通路^{註3)}
- (3)仮説として高齢者の心身機能に配慮した通路
- (4)老健施設の特徴を再現した通路

◆実験画像: 共用トイレ(い)～(に)の設定概要

【図2. ユーザーに提示した4つの実験トイレ画像】

- (い)老健施設に多いピンク壁のトイレ
- (ろ)便器の視認性。(明度・彩度・色相対比)

(は)療養型医療施設に多いベージュ床のトイレ
(に)便器の視認性と白内障傾向の見えでも色変化は無い(彩度・色相対比)

これらの仮説実験画像は、通路・トイレそれぞれの用途別に、ユーザーにとって快適な色彩環境評価をする際の要素として、<1>視認性など知覚・物理的要素が強く関わるのか<2>感情やイメージ嗜好など感覚・心理的要素がより強く関わるのか、を観点として作成した。通路はユーザーの一日の利用頻度と滞在時間が多く、生きるための睡眠・摂食・排泄といった具体的な行為の目的達成の空間ではなく、生きる時間プロセスの心理的な欲求充足の是非にかかると考えられ、心理的要素と知覚的要素の双方向を基本にした。また、トイレについては生きるための排泄という具体的な行為達成の空間であることから、物理的な欲求充足の是非にかかると考え、知覚的要素をベースとした。

3. 結果

以下図3. 図4. はユーザー評価の結果である。

【図3. 施設ユーザーによる通路の色彩環境評価】

【図4.施設ユーザーによるトイレの色彩環境評価】

被験者は回答を番号や記号で答える際、実験者が尋ねていない評価理由を自主的に発言した。通路：(1)(図3:不快評価67%)は、「病院臭い・暗い・陰気・寂しい・不潔感」と否定。また、看護・介護従事者が求めるイメージを再現した通路：(2)は、ユーザーにとっては、評価対象ではなく、援助者と被援助者との価値観のずれが伺えた。通路：(3)(図3:快評価46%)は高齢者施設の通路の実態例が無い仮説画像で、白内障の見えや視認性に配慮し、清潔で陽気で軽く、リズムカルでアクティビティなイメージである。この画像を快と

評価した被験者たちの反応行為には、ある特徴が見られた。表情を緩ませ、口頭よりも先に、或いは同時に指差しながら、「わかりやすい・好き・明るい・楽しい・元気・陽気・清潔・軽い」といった形容が他の画像に対する形容より多かった。次に図4. のトイレ評価は、通路評価ほど顕著ではないが、不快評価が(ろ)と(に)に集中した。被験者によると、「黄色い便器は目立っていいが、汚れがわからず気持ち悪い：(ろ)」「緑の便器は目だっていいが、ピンクの壁じゃおちつかない。(に)」トイレについては、回答する際に、便器が清潔かどうか、便座が温かいかどうか、手摺が使いやすいかどうかを質問する被験者が目立った。

これらを総括すると、①通路とトイレの色彩環境評価は、ユーザーの価値基準の要素が異なる。②通路は「明るい・楽しい・元気・陽気・軽い」など心理的要素と「わかりやすい・清潔」といった知覚・物理的要素が相互に関る。③トイレは「清潔・わかりやすい」など主として知覚・物理的要素に関る。

本調査は第三者の介入を遮断するために質問紙ではなく、平面ではあるが、それを見て空間認識が可能な被験者にビジュアルで示したことで、ユーザー自身の回答が得られた。しかし、高齢者にとって2次元のシミュレーション画像で色彩空間の全体性をイメージすることには限界がある。

今後の課題として、本調査でわかったことに基づき、第一次ユーザーとしての施設ユーザーには各ゾーニング別に3次元モデルによる評価データ数を増やすこと、第二次ユーザーとしての看護・介護従事者の施設の色彩環境に対する評価との共通性や差異の検討を重ねあわせることなど、ユーザーの色彩環境に対する欲求や価値観を作り手として可能な限り共有し、作り手と使い手の双方向からアプローチしていく構えである。

謝辞

本研究を支え、指導を続けて下さる武庫川女子大学生生活環境学科柏原士郎教授と、ご協力頂いた 12 施設 263 名のユーザーの皆様深く感謝致します。

本文注と参考文献

- 注 1)山下真知子、高齢者施設における色彩設計の実態—通路の色彩、日本建築学会地域施設シンポジウム論文、2006
- 注 2)山下真知子、高齢者施設における色彩設計の実態—通路のサイン、日本建築学会近畿支部論文、2006
- 注 3)看護・介護従事者 900 名の施設の色彩環境アンケート調査結果より
- 4)柏原士郎 編著：「建築デザインと環境計画」、朝倉書房、2005
- 5)赤塚大樹・濱畑彰子、高齢者の心理と看護・介護、培風館、2002
- 6)山下真知子：「色を生かす・色に生きる」、大覚寺出版部、2005